

7. 看護学生の一般的なコミュニケーション・スキルの関連性

—CMCの普及による時代背景の変化に着目して—

○大久保瞳(大阪大学附属病院),西澤桃子(製鉄記念広畑病院),西村美里(関西福祉大学看護学部)

I. はじめに

高齢者看護実習では、認知機能の低下や言語的コミュニケーション障害を抱えている高齢者と接する機会が多く、学生が普段活用しているコミュニケーション方法では相手の気持ちを確認したり看護者側の思いを伝えたりすることが困難である。そこで、学生のコミュニケーション・スキルに着目し、普段活用しているコミュニケーション・スキルが低い学生は認知症高齢者と関わる際に困難感を感じやすいのではないかと、また、CMC(携帯電話やインターネットを介したコミュニケーション)の普及が学生のコミュニケーション・スキルに影響を与えているのではないかと考えアンケート調査を行った。

II. 研究方法

1. K大学看護学部所属する4年生76名にアンケート調査を実施した。
2. 採取するデータ内容は、藤本・橋本(2007)のコミュニケーション・スキルのENDCOREs(自己統制、表現力、解釈力、自己主張、他者受容、関係調節の6つの下位概念で構成された24項目)、認知症高齢者とのコミュニケーションに関して困難感を感じた経験の有無、携帯電話やSNS(ソーシャルネットワーク)を使用している時間等で、関西福祉大学看護学部倫理審査委員会の承認を得て実施した。
3. データ分析方法は、ENDCOREsの各質問に対する得点が高い群と低い群に分け、認知症高齢者とのコミュニケーションに関する項目やCMCに関する項目についてカイ二乗検定を行った。統計ソフトはエクセル2015を使用した。

III. 結果

アンケート調査の回収数は67人(88.1%)で、有効回答数は63人(94.0%)であった。認知症高齢者とのコミュニケーションに困難感を感じた対象者は57人(90.4%)で、カイ二乗検定の結果、困難感を感じたことのある対象者は、ENDCOREsの「自己統制：自分の感情をうまくコントロールする($p=0.01$)」と「表現力：自分の考えを言葉でうまく表現する($p=0.02$)」、「表現力：自分の気持ちをしぐさでうまく表現する($p=0.003$)」、「表現力：自分の考えを表情でうまく表現する($p=0.01$)」、「自己主張：自分の主張を論理的に筋道をたてて説明する($p=0.01$)」の5項目で困難感を感じなかった対象者より低い得点を示した。また、SNS(ソーシャルネットワーク)を使用する1日の平均時間は 4.25 ± 3.12 時間で、SNS(ソーシャルネットワーク)を使用して本音を話すことができる対象者はENDCOREsの「他者受容：友好的な態度で相手に接する($p=0.0144$)」で、SNS上で本音を話せない対象者よりも得点が高い傾向にあった。

IV. 結論

認知症高齢者とのコミュニケーション場面では、ほとんどの対象者が困難感を感じており、困難感を感じた対象者はコミュニケーション・スキルの「自己統制」、「表現力」、「解釈力」の得点が高い傾向があった。コミュニケーション・スキルを向上させていくためには、日常的な対人コミュニケーションのあり方を意識的に変えていく努力や看護系大学における教育体制の中にコミュニケーション・スキル向上のための学習が必要であるといえる。